

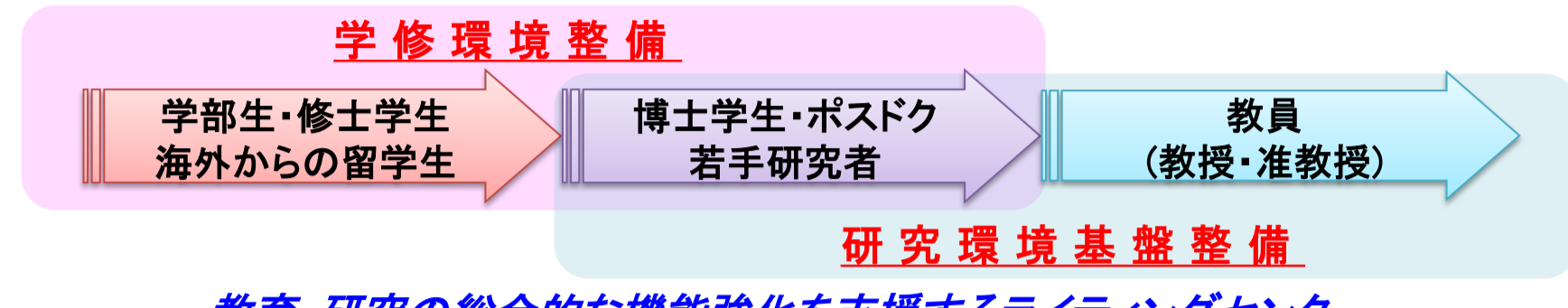
「英文校正利用の現状調査：研究支援の視点からの分析」

所属：広島大学 学術・社会産学連携室 研究企画室
発表者：三代川 典史、荒木 裕子、杉浦 仁美 (e-mail: ura@office.hiroshima-u.ac.jp)

1. 学内アンケート調査の背景と目的

【背景】

- ◆平成25年度よりRU事業の一環として、既存の「学修環境整備」に「研究環境基盤整備」を加えた「**広島大学型**」ライティングセンターの機能拡充に取り組んでいる。URAが業務の一環として、その取組みに参画している。



【目的】

- ◆URAとして、より適切な支援を行うために、教員の**英文校正利用動向**や**学内支援への期待**や**ニーズを正しく把握**する。
- ◆総合大学として、教員の多様性に対応した支援を行うため、**職階・専門分野などの属性による違い**を明らかにする。
- ◆英文校正業者情報を収集し、学内で情報共有する。

2. 調査対象、時期、方法

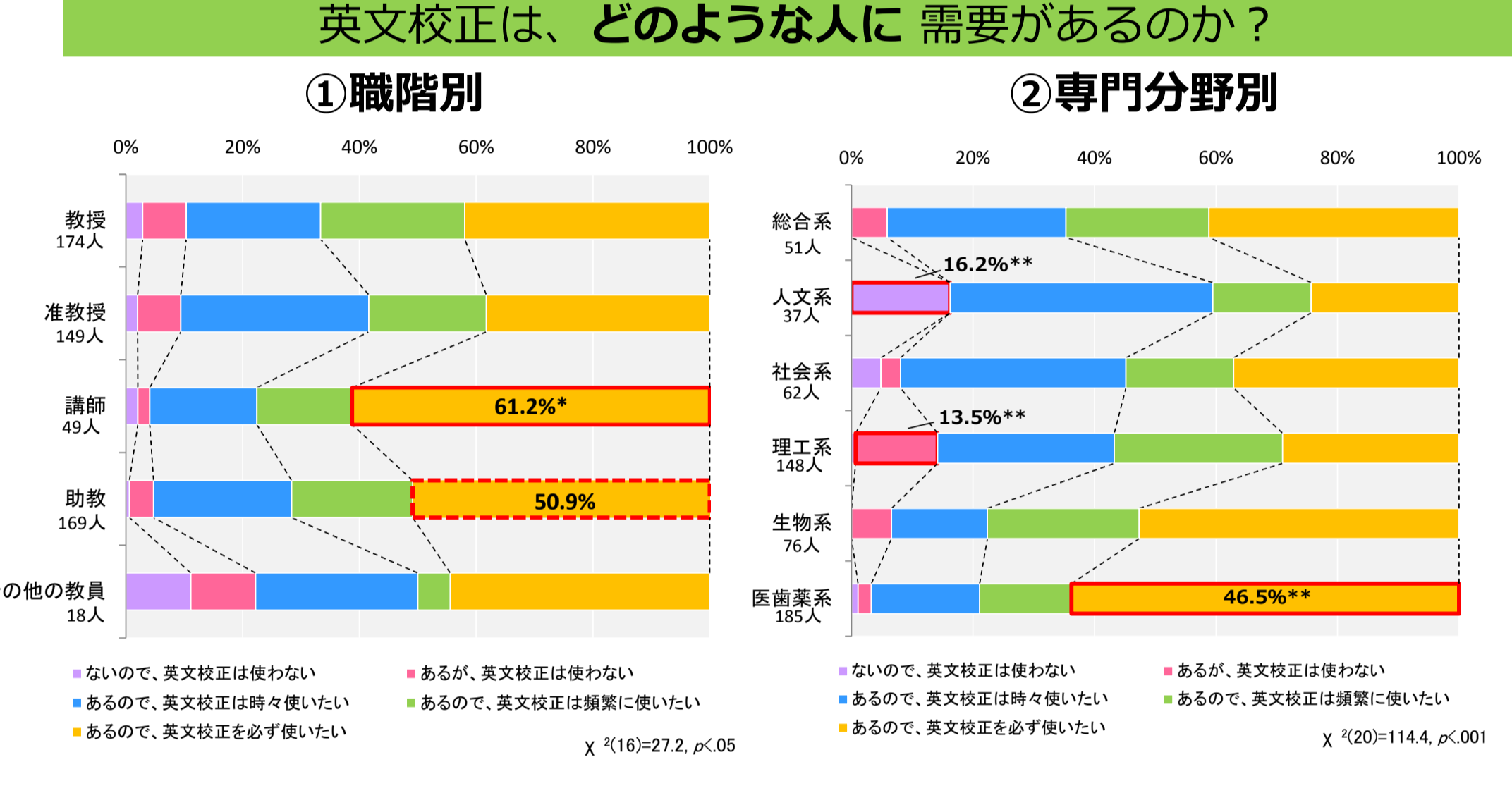
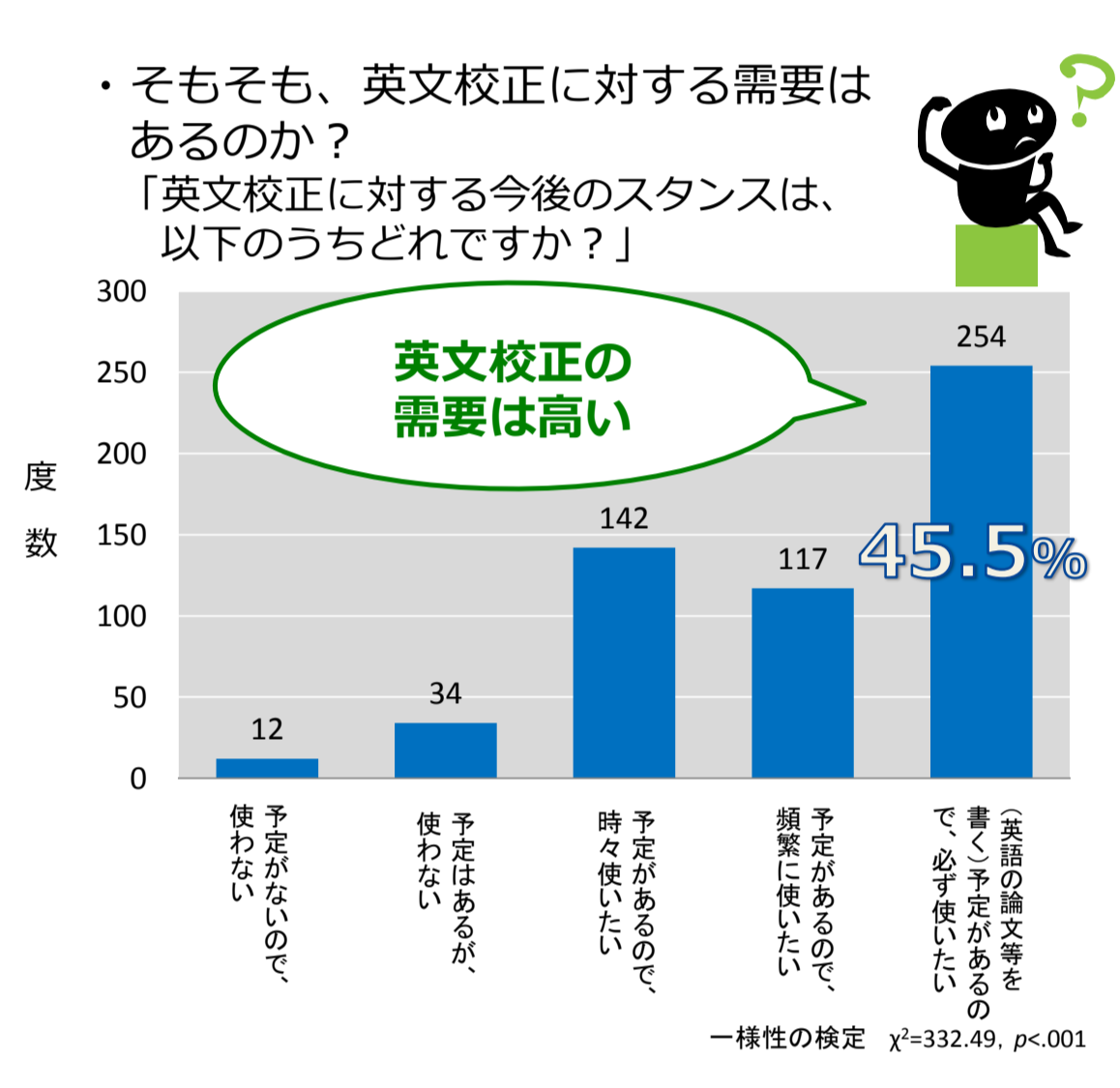
実施時期：2014年7月10日～31日
調査対象者：広島大学所属の教員（研究員含む）
調査方法：学内アンケートシステムを用いて、オンラインで回答を集めた

調査項目：

- ①英文校正に対する今後のスタンス
- ②過去、英文校正を行った際にかかった費用
- ③過去、英文校正を依頼したことのある相手（業者含む）
- ④その他属性情報（性別、年齢、職階、所属部局、専門分野）

有効回答数：559（男性455名、女性104名）
回収率：31%（559/1804）
年齢内訳：25～34歳12%、35～44歳35%、45～54歳33%、55～64歳19%、65歳以上1%
※年齢と性別の比率は、広大の全教員の比率とほぼ一致した
分析方法：クロス集計表を作成し、カイ二乗検定、残差分析を実施した

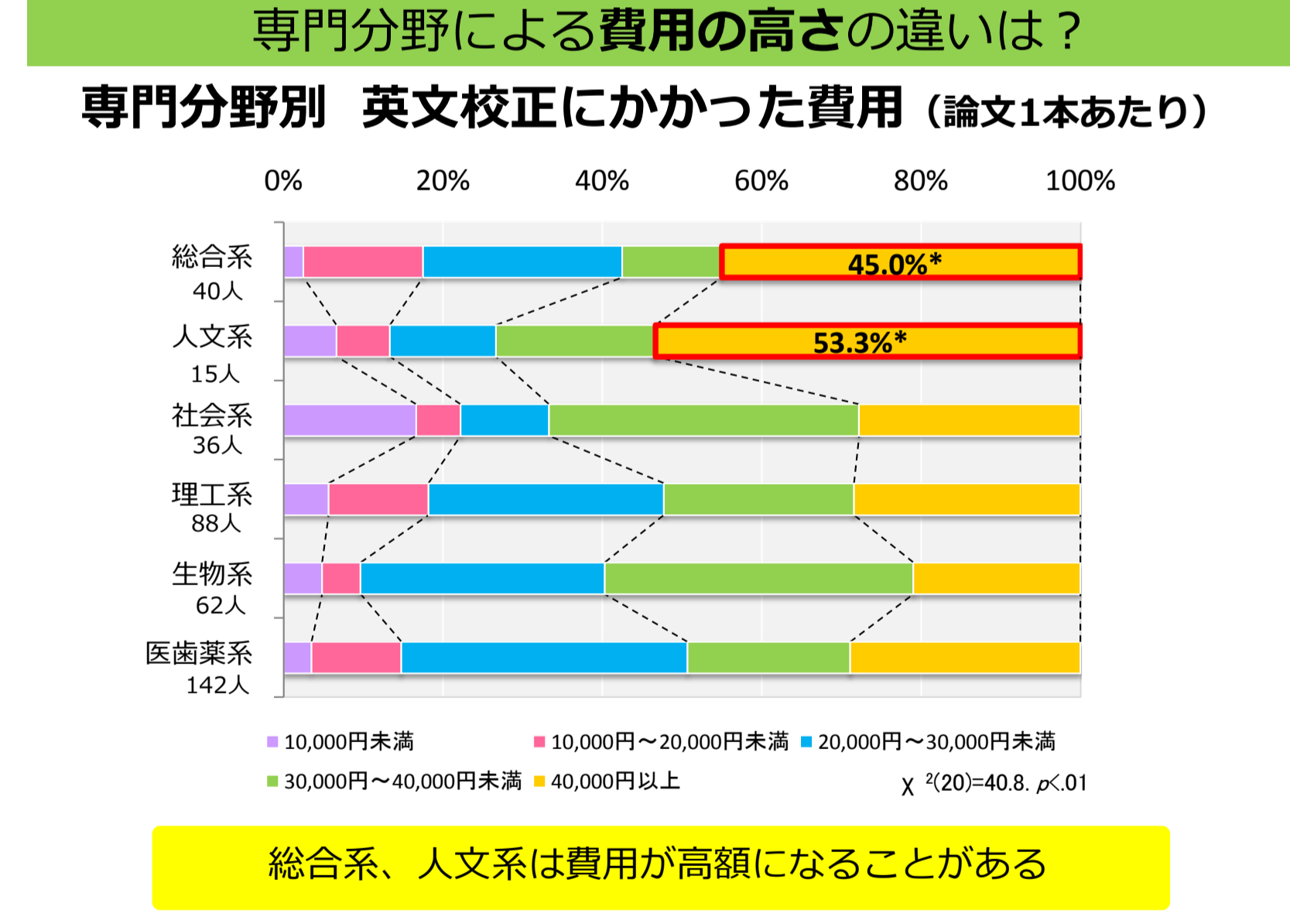
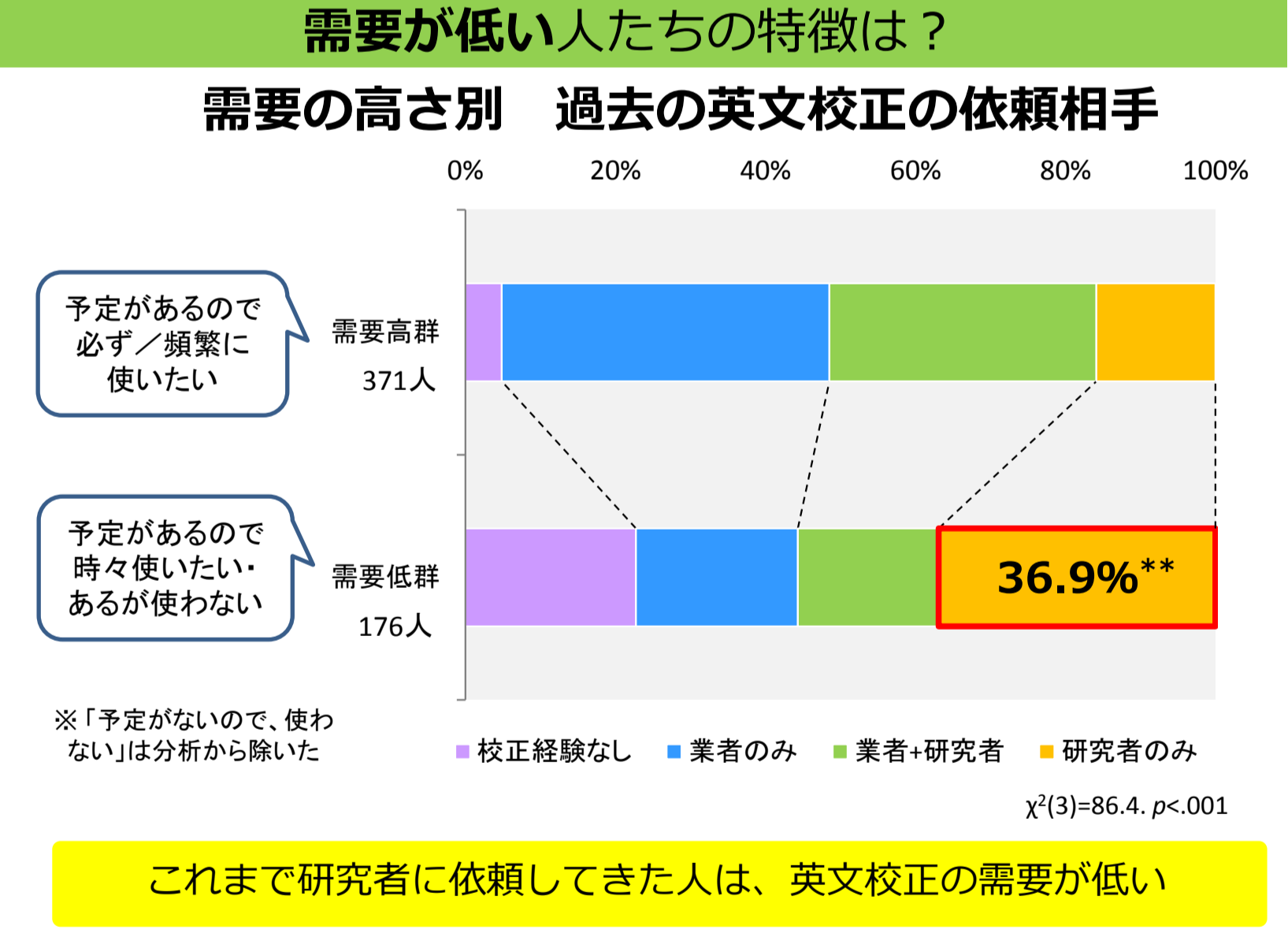
3. 結果



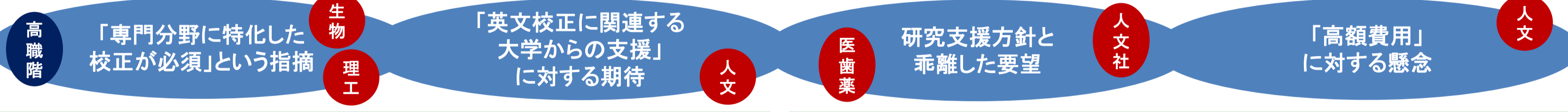
・計91.8%が「英文校正を(時々/頻繁に/必ず)使いたい」と回答
・45.5%が「英文校正を**必ず**使いたい」
→ 英文校正の需要は**高い**

さらに、職階別・専門分野別にみても…

- ① 講師・助教に需要が高い傾向があった
- ② 医歯薬系において、最も需要が高かった
- ③ 人文系・理工系では需要が低かった



自由記述にみられる、URAが目すべき意識傾向



4. 考察

- ◆低職階教員に英文校正の需要が高い傾向は、キャリアアップの必須条件として研究成果を英語で発表する必要性をより痛感しているからと推察される。これは、**大学院生**にも通じると考えられる。
- ◆支援によって期待される効果：①英文校正費助成により**教員の財政負担軽減**、②校正業者に関する情報提供により**効果的な業者利用**を促し、英語論文の質を底上げ（→**ジャーナル採択率UP**）。
- ◆校正業者活用を効率的に拡大すれば、教員が**大学院生の英語論文指導に費やす時間を削減できる可能性**（→**研究時間増加**）。
- ◆また、英文校正への高需要という調査結果の根本要因を考慮すると、**英語論文執筆能力自体の向上**への支援も必要と考えられる。
- ◆専門分野に応じた英文校正の重要性に着目すると、**英文校正業者の得意分野**に関する情報共有は、有力な支援となり得る。
- ◆**医歯薬系**での需要の高さの要因は、この分野で既に専門性の高い英文校正サービス利用が一般的になっているためだと推測される。
- ◆人文系英文校正費用が高額と回答された要因は、**人文系論文の長さ**の他、英文校正と翻訳（日→英）の混同も推察される。

5. 今後に向けて

- 広大型英文校正支援の方針についての学内周知徹底
- アンケート分析結果の開示
- 業者の強み(分野別)の情報共有

情報の全学的共有

- 啓発的セミナー
 - ✓ 国際共著論文発表の重要性
 - ✓ 英文校正の効果的活用
- 能力向上セミナー・ワークショップ
 - ✓ 英語論文執筆スキル

非活発層への対応

- 英文校正への需要が高い若手研究者向けの支援構築
- 専門分野別の助成水準設定

多様性への対応

URA能力の底上げ

- アンケート設計力
- 定量的・定性的分析力
- 分析 → 戦略への適用力